

偉人の生き様 死に模様

アンネ・フランク

(1929~1945)

さまざまな分野における世界の偉人たち。そんな彼らの今も語り継がれる生き方や、死に際に残した言葉などを紹介していきます。第12回は第二次世界大戦の中、ナチス政権による迫害を受け、15歳の若さで命を落としたユダヤ人少女、アンネ・フランク。彼女が残した「アンネの日記」には過酷な状況下でも強い心や志、前向きな夢を持つことの大切さが記されています。その生き生きとした言の葉たちは、後に70もの言語に翻訳され、世界中の人に希望を与えました。今回は悲劇の少女、アンネ・フランクの短い人生を紐解きます。

●「アンネ・フランクの幼少期」

アンネ・フランクは1929年6月12日、ドイツのフランクフルトで生まれました。当時のドイツは景気が悪く、アンネはユダヤ系ドイツ人の父オットーと母エーディト、3歳年上の姉マルゴットと慎ましく暮らしていました。その頃、ドイツではヒトラー率いるナチス政権が勢力を伸ばしていました。さらに、ユダヤ人を憎むヒトラーはドイツが抱える問題を全てユダヤ人の責任にし、反ユダヤ感情をドイツ国内に拡散。ユダヤ人は迫害され、仕事も学校も制限され、自由を奪われたのです。それだけにとどまらず、ヨーロッパ各地の強制収容所に送られたり、過酷な環境での労働や人体実験、さらには数えきれないほど多くのユダヤ人がガ

ス室へと送り込まれました。そんな理不尽なドイツの政策に危険を感じたアンネ一家はオランダへと渡ります。アムステルダムでの暮らしはアンネにとっても束の間の平穏な日々でした。

●「オランダでの暮らし」

アムステルダムでは父のオットーがジャム作りなどに使うペクチンの会社を設立し、家族のために必死に働きました。アンネもすぐにオランダ語を覚え、近所の学校に通い、異国の暮らしに馴染んでいきました。しかし、アンネが10歳になった1939年、ナチス軍がポーランドを侵略し、第二次世界大戦が始まりました。その翌年にはナチス軍はオランダへも侵攻し、オランダ軍は降伏。それを機にユダヤ人に対する風当たりは厳しくなり、アンネ一家も困難な生活を強いられていきます。ナチス軍が導入した法律や条例によりユダヤ人は公園、映画館、商店などへの出入りも禁止され、監視され、差別され、自由はどこにもありませんでした。会社を持つことも許されなかったため、オットーは大切な会社を失ってしまったのです。

●「約2年間の隠れ家生活」

ナチス政権によるユダヤ人への迫害はさらに進行。ユダヤ人はオランダから出て行かなければいけないという風潮もありました。そんな中、1942年にアンネ一家はオットーの会社裏にあった隠れ家へ引越をします。その隠れ家はとても小さく、自分たちの存在を消すことでしか、生きる道がないという壮絶な日々。アンネも息を潜めて暮らしていましたが2年後、ついに警察へ強制移動させられ、その後、アンネと姉だけがベルゲン・ベルセン収容所へと送られました。当然ながらベルゲン・ベルセンも劣悪な環境で食事もほぼ与えられません。心身ともに極限状態であった姉妹は収容所内で蔓延していたチフスにかかり1945年2月、マルゴット18歳、アンネ15歳という若さで天国へと召されてしまいました。そんな無念の死の2ヶ月後にドイツは敗戦し、イギリス連合軍により収容所は解放されたのです。

私は、死んだ後でも生き続けたい

隠れ家への引越数日前にアンネは父から誕生日祝いとして可愛いサイン帳を貰いました。アンネはそのサイン帳に2年間、毎日日記を書き続けました。当時13~15歳の彼女が紡いだ言葉は、隠れ家生活とは思えないほど、生き生きとした彩りあるものばかり。「希望があるところに人生もある。希望が新しい勇気をもたらし、再び強い気持ちにしてくれる」。アンネの言葉は極限の苦境にありながらも希望を持つこと、強い気持ちを持つこと、未来を信じることの大切さを私たちに教えてくれているようです。日々の出来事、喜び、悲しみを素直に書き記した「アンネの日記」は時を超えて一冊の本となり、世界中の人々に夢や希望、勇気を与える大きな存在となっています。「私は、死んだ後でも生き続けたい」という彼女の言葉通り、アンネの魂のメッセージは読んだ人の心の中でずっと生き続けています。